

【研究ノート】

# シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考(VIII)

原田 覺

本稿は下記拙稿に接続するものであり、以下に現代語訳する資料などについて、特に科文の全体的構成については下記拙稿(I)を参照頂きたい。

「シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考(I、II、III、IV、V、VI、VII)」『国士館哲学』10、11、12、13、14、15、16号、国士館大学哲学会、東京、2006(平成18)、2007(平成19)、2008(平成20)、2009(平成21)、2010(平成22)、2011(平成23)、2012(平成24)年

また近年、下記研究の出版があったので、同じく参照頂きたい。

Yaroslav Komarovski, *Visions of Unity: the golden pandita Shakyas Chokden's new interpretation of yogacara and madhyamaka*, State University of New York, Albany, USA., 2011.

【第3段落】これは瑜伽行派の典籍から生起する(5/6)了義[で]その究竟のものであるのであるけれど| 規矩を区別する二者の[考え]方の了義は如何なる如くであるのであるかと[いう]ならば| [帰]謬[派と]自[立派と]として共許である典籍が直接[的]に教示した了義でないのであるけれど| 実体性は無いと述べる阿闍梨方によっても修習によって実行すべく為されるべき(6/7)了義としてご承認されたことなのであるであって| [何故ならば]その阿闍梨方は| 一般[的に]最後のご教誨と特別[に密]咒[と]の了義を説示するときにその如く[に]説示することは歪曲すべく出来ないが故[に]であり| その智は阿頼耶[の]本体であるのであるが| 阿頼耶の識とは矛盾するものであるのであるであって| [何故ならば]一切の善(42b7/43a1)の最上であるのであることと| その識の対治そのものとして『攝[大]乗[論]』から明らかに仰せになったが故[に]であり| それによるならば『[空行母]金剛帳』rDo rje gur

に| 「それ[がそうである]通り[に]阿頼耶の識と| |法の界と生起しなかった[もの](錯誤)ma byuñ [ba]と| |虚空の界と自己[の]界 rañ dbyiñs(1/2)と| |我が無いことと愛護 bdag ces/gces と| |」と[いう]等[の]多くの名称の異門によって教示されたことは| 『阿毘[達磨]』 *mñon pa* に於いて共許であるその識に付いて説示するのではないのであって| [何故ならば]それは法界と勝義[と]の我などに於いて不適切であるが故[に]であり| その如くであるならばまた| それを承認した(2/3)ときに阿頼耶の識を承認したこととして成立し了って| [何故ならば]阿頼耶の識の上の明らかに為されるべき[もの]に付いてそこで識別する必要があるが故[に]である| [|]

著者は、以上の主張「は瑜伽行派の」「究竟の」「了義」で「あるけれど」「規矩を区別する二者の[考え]方の了義は如何なる」「かと」自問し、自答して「[帰]謬[派と]自[立派]」の「典籍」の「了義でない」「けれど」「実体性は無いと述べる阿闍梨」によっても修習によって実行「されるべき了義として」「承認されたことである」とし、その論拠として「実体性は無いと述べる阿闍梨」「は」「一般[的に]最後のご教誨と特別[に密]咒[と]の了義を説示するときに」「説示することは歪曲すべく出来ないが故[に]」であるとし、また第1段落「の智は阿頼耶[の]本体である」けれど「阿頼耶の識とは矛盾するものである」とし、その論拠として「阿頼耶」は「一切の善の最上であり」『攝[大]乗[論]』は「その識の対治」として「仰せになったが故[に]」であるとした上で『[空行母]金剛帳』から一種類の引証を提示し、その様な「多くの名称の異門」「は」『阿毘[達磨]』で論じる「識」「でない」として、その論拠として『阿毘[達磨]』の「識」「は法界と勝義」「の我」として「不適切であるが故[に]」であるとし、更に『阿毘[達磨]』のではない「識」「を承認したときに阿頼耶の識を承認したこと」となるとし、その論拠として「阿頼耶の識の上の明らかに」「されるべき[もの]に付いて」「識別する必要があるが故[に]」である」とする。

<2 2 2 2 3 2 1> 【第1段落】最初[の項目]は| 「自己[による]証悟[たる]自己が明白である[こと]rañ gsal を諦として承認する| |中[観]のこの[考え]方は『秘密集[会]』と| |三の『喜金剛[の]統』[の]注釈?』 *dGyes rdor rgyud gsum* と三種[類]の『菩薩の典籍[の]注釈』 *Byañ chub sems dpah yī* | | *gshuñ grel skor gsum* (北京版 No. ?) [と]等」に明らかにあわす| |」(4/5)と[いう]のは| 所取[と]能取[との]二と離れたこの自己[による]証悟

[たる]自己が明白であることに対して| 大乘の完全に変化することが無い  
mñon par hgyur ba med pañi 円成[実性]であると説示しり且つ| それ  
そのものを諦[として]成立[したもの](諦実有) bden grub であると説示  
すること| 実体によって空であると承認すること[と]は| 木車の二の規矩  
の[殊勝の]差別であるのであるうえ| 「それ(5/6)のみによって反面[で]事  
物[は有ると]述べる者 dños [po] smra ba と成ったのである| |」と後代  
のチベット人達と一緒に説示するそれを捨離すべき意義としてこの  
偈頌を講説したのである| |

著者は典拠を明示しない一種類の引証を提示し、それを解説して「所取[と]  
能取」の「二と離れた」「自」「証」である「自己が明白である」ことを「大乘の完全  
に変化することが無い円成[実性]であると説示し」「それ」「を諦」実有「と説示  
する」の「と」同じ「それ」を「実体によって空であると承認する」の「と」「は」「木車  
の二の規矩の[殊勝の]差別であるの」に「それ」を「事物[は有ると]述べる者」  
であるとする「後代のチベット人達」の「説示」「を捨離すべき意義として」否  
定する為に「この偈頌を講説した」とする。

【第 2 段落】それを如何なる如く[に]捨離するべく出来るのかと云うなら  
ば| 所取[と]能取[との]二は世俗諦[で]そして| 二[として]無い(無二の)  
智は勝義の諦であると説示する(6/7)中[観]の道理 tshul lugs を主尊[者た  
る]弥勒の中間の三の典籍に明らかに仰せになったのを| 無着ご兄弟が如何  
なる如く[であれそれがそうである]通りに注釈したこの見解は| 吉祥なる  
『秘密集[会]』の根本続の第二品[たる]「菩提の心の品」Byañ chub kyi  
sems kyi lehu から明らかに仰せになった(43a7/b1)うえ| それそのものは  
龍樹ご足下の『菩提心釈[論]』と| 『五次第』Rim pa lña pa と| 広釈[た  
る]『灯明』(北京版 No. 2648-9?)と| 『勝者が布施した[続]の難[語]釈』rGyal  
bas byin gyi dkañ hgre(北京版 No. ?)[と]等に明らかに仰せになったこと  
と| 『喜金剛』[の]根本の続 dGyes pa rdo rje rtsa bañi rgyud(北京版 No.  
10?)に| 「śrīは二[として]無い智であって| |He は因(1/2)等[の]空性  
[で]| |ru は資糧(会供)と離れたことであって| |ka は何ものにも住さな  
いことなのである| |」と完全に[解]脱する門は空性などの実体[たる]智で  
であると説示されたことと| 「自己による証悟のこの智は| |」と言われる等  
[の]住[する考え]方(本質)が通達される知覚を(2/3)自己[による]証悟であ

ると説示したものが本当に沢山であることと| 勝義[たる]菩提の心を勝義の諦であると説示したことと| 『[空行母]金剛帳』にも心の金剛を淨治したる基礎であると説示したことと| 我が無いこと(無我)と自性[と]を般若[波羅]蜜多などの実体[たる]Yum(母上)の語に誦し了って gton/bton から智であると説示されたことと| (3/4)『[空行母]金剛帳』と[いう]ことそのものをも法界であると説示することと| 色[と]声[と]等[の]遍計[所執性]と| 法性の色[と]声[と]等[と]色[たる]金剛女などの実体[と]として承認し了ってから説示する必要がある(4/5)ことと| 『サンプタ』*Sam bu ta*(北京版 No. 26~7)からも| 「空性を識別する時に| 伺察し了る[こと]無く且つ所知でないのであり| |それ[が]そうである]通り[に]推論によって分別さるべき[に]困難[で]| |二を捨離し了り二として無いものであつて| |如何なる通りであれ道の真实性を聞きなさい| |」と所取[と]能取[との]二[として]無い(無二の)智に付いて説示した章節は(5/6)本当に沢山であることと| 三種[類]の『菩薩の注釈』*Byaṅ chub sems dpahi grel pa skor gsum*(北京版 No. ?)に於いて空性と言われる名前を持つもの達の内から| 最殊勝と賞賛されるのは一切の行相の最高と共なる空性であると説示されたことと| 特別[に]『無垢の光』から| 「誰(6/7)によってであれ最初の仏陀が分からない[その]彼によって正しく詮説されたお名前は分からないのである| |それが分からないので勝義のお身体[も]分からず| |それが分からないので[密]咒の乗[も]分からないのである| |」と[いう]等は本当に沢山なのである| |

前段落の「後代のチベット人達」の「説示」「を捨離する」議論を著者は以下に示しており、第一に「所取[と]能取」「は世俗諦」で、無二の「智は勝義」「諦であると」「する」のが「中[観]の道理」であり、それは「弥勒の中間の三の典籍」と、それ等に対する「無着」「兄弟」の「注釈」の「見解」であり、同じく『秘密集[会]』『の第二品』にも「明らか」としてした上で、同じ「見解」「は龍樹」「の』『[菩提]心釈[論]』『第五次第』『灯明』『勝者が布施した[続]の難[語]釈』『等に]も有るとし、第二に『喜金剛』から一種類の経証を提示して「完全に[解]脱する門は空性などの実体[たる]智であると説示」しているとし、第三に「自」「証」「の智」「と言」う本質に「通達」す「る知覚を」「自」「証」「であると説示したものが」「沢山」「ある」とし、第四に「勝義[たる]菩提」「心を勝義」「諦」「と説示し」しているとし、第五に『[空行母]金剛帳』「も心の金剛を淨治」の「基礎」「と説示し」てい

るとし、第六に無我「と自性」を般若[波羅]蜜多「の実体[たる]Yumの語に誦し」「てから智」「と説示」しているとし、第七に『[空行母]金剛帳』「そのものを」「法界」「と説示」しているとし、第八に「色[と]声」「等」を「各三に分け」「て」「通常の色[と]声」「等[の]遍計[所執性]と」「法性の色[と]声」「等」と「色[たる]金剛女」「の実体」と「として承認し」「てから説示する必要がある」とし、第九に『サンブタ』から一種類の経証を提示して「所取[と]能取」の無二の「智」に付いて説示した章節は「沢山」「ある」とし、第十に「三種[類]の」『菩薩の注釈』「に於いて空性と言」う「名前を持つもの」「の内」で「最殊勝と賞賛」するの是一切の行相の最高と共なる空性であると説示」しているとし、第十一に『無垢の光』「から」一種類の経証を提示して、その様な主張は「沢山」「ある」とする。

**【第3段落】** それに対してここで二の疑惑を破壊すべく sig/bśig 捨離すべき必要があることから | 勝義(43b7/44a1)諦に於いて諦[として]成立[したこと](諦実有)により遍充されないことは捨離し了り終わるのみに完了せず | 中[観]帰謬派であると承認する者[たる]貴方がたは | 言説として諦[として]成立[したこと]を承認しないこととマア言説として我を承認すること | 言説の安立すべきことを世間の共許(1/2)の如く[に]承認すること[と]などが矛盾するのである | |

第一段落の「後代のチベット人達」の「説示」に対して「ここで」所取と能取の「二の疑惑を破壊すべく捨離すべき必要がある」ので、著者の主張する「勝義諦に」対し「て」諦実有が「遍充」し「ないことは」その「疑惑を」「捨離し」「終わる」だけでなく「中[観]帰謬派である」「貴方がたは」「言説として」諦実有「を承認しないことと」「言説として我を承認することと」「言説の安立すべきことを世間の共許の如く[に]承認すること」と「などが矛盾する」と著者は批判する。

**【第4段落】** 不変 hgyur med[たる]円成[実性]の識別が迷乱するのである[と]想う[よう]に疑惑する者達が後[代]のチベットに生起するけれど | 弥勒[の]法の説示した規矩は rNog pa から[の]一相承に於いてその識別を、が無い否定と為す者が生起したけれども | その説示した規矩は修習[の]考え]方(2/3)として説示するものであると共許[で] | bTsan Kha bo che の説示した規矩として生起したものより | 不変[たる]円成[実性]の識別は前者の

如く[に]説示することそのものが善くて| [何故ならば]典籍[の]注釈[の]全部の明文叙述 tshig zin と一致し且つ個別的自己[による]証悟の智と前後調和すること guñ hgrig pa と| が無い(3/4)否定として説示したならば『釈[量論]』をお造りになった本文と本当に矛盾すること[と]の故にである| [ ]

「不変[たる]円成[実性]の識別が迷乱する」と「想う」につけ「疑惑する者達が後[代]のチベットに生起」し「弥勒[の]法の」「規矩は rNog pa から[の]一相承に於いて」「識別を、が無い否定と為す者が生起したけれど」「その」「規矩は修習[の]考え」方として説示した「と共許」であり、一方 bTsan Kha bo che「の」「規矩」「より」「不変[たる]円成[実性]の識別は前者」即ち第一段落「の」「説示」の方「が善」いとし、その論拠として「典籍[の]注釈[の]全部の明文叙述と一致し」「個別的自」「証」「の智と前後調和すること」と「が無い否定として説示したならば『釈[量論]』の「本文と」「矛盾すること」と「の故にである」とする。

<2 2 2 2 3 2 2>【第1段落】第二[の]項目は| 「中間の三の弥勒[の]法[で]無着兄弟の典籍[の]注釈と共なるものに於いて| 円成[実性]を諦[として]無[い]として決定する経教[と]道理[と]を説示したことが無いが故にであるならば| その(4/5)見解によって諦[として]執着[する] (諦有執の)種子を根絶する様に出来ないのである| 」と[いう]ならば| 回答に三あって| 自己[による]証悟[たる]自己[が]明白[である]知によって全部の性相[として]執着する[こと] mtshan hdzin を排除出来ることと| それが出来ないならば月[称]の典籍に於いても甚大に[帰]謬することと| 『宝性の論』の了義に於いても甚(5/6)大に[帰]謬すること[と]なのである| |

著者は典拠を明示しない一種類の敵者の主張を提示し、その主張を否定する「三」種類の「回答」があるとし、第一に「自」「証」たる「自己[が]明白[である]知によって全部の性相[として]執着する[こと]を排除出来る」とし、第二に「排除出来」「ないならば月[称]の典籍」は帰「謬する」とし、第三に『宝性の論』の「了義」「も」帰「謬する」とする。

【第2段落】最初は| 「それ故[に]無着がご承認になるこの中[観]に於い

て| |二[として]無い智を諦[として]無い[と]成就する| |分[かるように]  
為[すもの](因由)[たる]喩[例]と理由[と]を仰せにならなかったけれども|  
|と[いう]のは| [密]咒[の考え]方の修習によって体験する[ように]為さ  
れるべき了義は心の金剛と全行相[の](6/7)最高[と]共なる空性[と]に付い  
て説示されたこと[で]その故[に]無着ご足下が注釈した中[観]の論書などに  
於いて所取[と]能取[との]二[として]無い智を諦[として]無いと成就する理  
由と喩[例と]は| 如何であれ話として| 「その智も勝[義]として| |有る  
と(44a7/b1)学[者]達は同意しなくて| |一と多[と]の自性と| |離れたが  
故[に]虚空の蓮花[が]そうである]通り[に]| |と[いう]ことの如く[に]は  
仰せにならなかったのである| |

前段落の「回答」の第一を示す為に、先ず著者は典拠を明示しない一種類の  
引証を提示し、その引証を注釈して「[密]咒[の考え]方の修習によって体験す  
る」「べき了義は心の金剛と全行相[の]最高[と]共なる空性」「に付いて説示さ  
れたこと[で]その故[に]無着」「が注釈した中[観]の論書」「に於いて所取[と]  
能取」の無二の「智を諦」「無」として「成就する理由と喩[例]」「は」として、典拠  
を明示しない一種類の引証を提示し、その如く[に]は仰せにならなかった」  
とする。

**【第3段落】**それを仰せにならない因由は| その因[と]喩[例と]に依存し  
た知は何かであるのであるけれども| 比度[量]或はそれが導いた(1/2)分別  
そのものから脱し了らないうえ| その智はその分別の対境から脱しなかつ  
たが故[に]であり| それ[たる]話としても| 『宝性[論]』に| 「分別すべ  
きでないのであり比度[量]を為すべきでないのであるが故[に]| |と仰せ  
になったのである| |

前段落の「理由と喩[例]」「を仰せにならな」かった「因由は」「因[と]喩」「に  
依存した知は何かである」「けれども」「比度[量]」と「比度[量]」「が導いた分  
別」「から脱し」てい「ない」し、更に「知」たる「智は」「分別の対境から脱し」てい  
ない「が故」に「である」とした上で『宝性[論]』から一種類の教証を提示する。

**【第4段落】**それによるならば実体性はないと述べる[考え]方の道理[たる]  
それとそれ[と](斯く斯く云々)の面に於いてその智(2/3)そのものは一と多

[と]等[の]何として[も]成立しなかったけれども| 瑜伽師の智が歪曲出来ずに体験することによるならば| その如く[に]決定したけれども必要[性]と可能[性]とは無いとお考えになったことなのである| |

前段落の『宝性[論]』の教証に「よるならば実体性は無いと述べる[考え]方の道理」として、斯く斯く云々と言う「面に於いて」「智」「は一と多」「等[の]何として[も]成立しな」「い」「けれど」一方で「瑜伽師の智が歪曲出来ずに体験することによるならば」前段落の教証「の如く[に]決定したけれど」それ以上に「理由と喩[例]」「を仰せにな」るべき「必要[性]と可能[性]」「は無いとお考えになった」「のである」とする。

【第5段落】遍計[所執性]の法に対しては相応しなくて| [何故ならば]識の対境(3/4)から脱しなかったが故[に]であり| その如くであるならば言説の時[に]有る[と]無い[との]設定は対象と一致する様に設定することも| 聖者の等引[の]智がご覧になることとご覧にならないこと[と]そのもの以外[の]他の因由は無いとお考えになるのである| |

以上の議論は「遍計[所執性]の法に対しては相応しな」とし、その論拠として「遍計[所執性]の法」は「識の対境から脱し」ていない「が故[に]である」とし、それを前提として「遍計[所執性]の法」たる「言説の時[に]有る[と]無い」の「設定は対象と一致する様に設定する」にして「も」「聖者の等引[の]智がご覧になる」「とご覧にならない」「以外[の]他の因由は無いとお考えになる」とする。

【第6段落】それはまた等引すべき(4/5)理解[されるように]為されるべき[こと](理解対象)rig bya[r]と成ったその主要な勝義は| 言説の対境から脱したり且つ| 言説の対境に行った限りそれは主要な勝義でないのであるけれどもそれとそれ[と]と輕慢してから円成[実性]は諦として成立したのである| |と后得として成立した辺を設定するのは瑜伽行者たちの[考え]方なのである| |(5/6)

前段落の「聖者の等引[の]智」の理解対象「と成った」「主要な勝義は」「言説の対境から脱し了」っており、一方で「言説の対境」である「限り」「は主要な勝



義でない」「けれども」斯く斯く云々」と輕慢して「円成[実性]は諦として成立した」「と后得として成立した辺を設定するのが「瑜伽行者たちの[考え]方」「である」とする。

【第7段落】その如く[に]仰せにならなかったけれども| 「自己[による]証悟が自己が明白である[こと]として成立したときに| |そこで所縁の戲論の諸集合と| |常と断[と]の諸集合[との]全てから解脱する| |」と[いう]のは| 波羅蜜多の乗は何等であれ| 所取[と]能取と常[と]断[と]の部分的戲論だけ(6/7)のみを聞[学と]思[量と]の道理によって伺察することと| その対象に対して等引すること[との]そのものとして為されなかったならば| 自己[による]証悟[たる]自己が明白である[こと]が現前に見えることでないのであって| [何故ならば]異生と| 声聞と| 独覚[と]達は[如来]藏が見えることに対する目と共でないと説示されたが(44b7/45a1)故にであり| それが現前に見えてからはそれに対して遮蔽する[ように]為す戲論の集合はその等引に生起しないのみに終わらず| 后得としても次第に減少する様になって| [何故ならば]見えること(見)と修習すること(修)の道の次第によってなのである| |

以下「の如く[に]」は「仰せにならなかった」とした上で、著者は典拠を明示しない種類の引証を提示し、その引証を注釈して「波羅蜜多の」「乗が」「所取[と]能取と常[と]断」という「部分的戲論だけ」「を聞」「思」「の道理によって伺察」し「所取[と]能取と常[と]断」「に対して等引する」ように「為さ」「ない」「ならば」「自」「証」たる「自己が明白である[こと]が現前に見」「え」「ない」ことでありとし、その論拠として「異生と」「声聞と」「独覚」「は[如来]藏が見える」「目」を持っていない「と説示されたが故にである」とし、更に「自」「証」たる「自己が明白である」こと「が現前に見え」たならば「それに対して遮蔽」させる「戲論の集合は」「その等引に生起しない」だけでなく「后得としても次第に減少する」とし、その論拠として、見「道」と修「道の次第によ」る「のである」とする。

【第8段落】智に対して諦[として]執着する(1/2)知覚を回避することに於いてその智そのものを諦[として]無い[もの]として成就する必要があるのではないのであって| [何故ならば]能遍[たる]執着そのものは自己の実体によって空であると成立するときにそれは阻止されるが故[に]なのである| |

「智に対」する諦有執の「知覚を回避する」のに「智」「を諦」「無」「として成就する必要」は「ない」とし、その論拠として「能遍[たる]執着」「は自己の実体によって空であると成立するとき」「阻止されるが故」に「である」とする。

**【第 9 段落】**一般[的に]対境を否定し[る]ことのみによって有境の執着に於ける相として固執することが消失し[る]定めは無くても | [何故ならば]声聞(2/3)の乗の者によって補特伽羅の我は自己の実体によって空であると通達されるけれども | 補特伽羅の我[として]執着する[こと]は実体によって空であると通達されないこと[が]そうである通り[に]なのである | |

「一般[的に]対境を否定」するだけで「有境の執着に」「相として固執することが消失」する「定めは無」いとし、その論拠として「声聞」「乗」では「補特伽羅の我は自己の実体によって空であると通達」する「けれど」「補特伽羅の我[として]執着する[こと]は実体によって空であると通達」しない「通り」に「なのである」とする。

**【第 10 段落】**智は諦[として]有ると承認するならば常住の辺から解[脱]しないのである[と]想うならば | 法が何であるのであっても | 自己[として]執着する分別(3/4)と識[と]が如何なる如く[に]であれ執着したもの[が]そうである通り[に]有るものそのものとして承認したならば常住と | その様[に]それに対して何時か智がご覧になったものが誤りそのものであることを承認したならば断滅[と]の辺に設定することなのであるが | 自性は空性であると言われるのは | 永久[に]他に成ることは(4/5)有り得ないこと[で]それは | 智の面で有ることそのものとして承認したこと[に]於いて | 常住の辺に成ることが何処に有ろうか | と[いう]のは無着のものなのである | |

「智は諦[として]有ると承認するならば常住の辺から解[脱]しない」とする「ならば」「法が何であれ」「自己[として]執着する分別と識[と]が」「執着した」「通り」に「有る」「として承認したならば常住」で、同「様[に]それに対して」「智がご覧になったものが誤り」「である」と「承認したならば断滅」「の辺に設定すること」になるけれど「自性は空性である」と「は」「永久[に]他に成ることは有

り得ないこと[で]それは「智の面で有る」「として承認したこと」で「常住の辺に成ること」は無い「と[いう]の」が「無着の」考え方「なのである」とする。

【第 11 段落】第二は| 阿闍梨[たる]清弁が| 『思擇焰』 *rTog ge hbar ba*(北京版 No. 5256)に於いて| 「自己の[考え]方(自の宗)の我慢によって| |精通する様に(5/6)輕慢する他はこれ[たる]話を述べ| 「彼自身は甘露に入ることも| |瑜伽行者が宜しく教示した| |大乘者そのものの阿闍梨[たる]無着と世親[と]等の他[の]方々は| 如来が授記し了り且つ| 地[で]歓喜(歓喜の地)を証得(6/7)した聖者[たる]竜樹によって正しく通達された大乘の[考え]方を他に導く様に為し且つ| 慚と愧[と]が無い者[で]意義が全く分からず[そうである]通りに精通した様に我慢を為す者達はこれ[たる]話を述べて| 」と連接(紹介?)し了ってから| 「事物[たる]二(45a7/b1)者は無いが故[に]| |二[たる]事物は無いことの有ること[で]| |有る等[の]知覚の対境は| |勝の義である同意するのであるとのことである| |」と[いう]等[の]中[と]辺[と]の沢山の[考え]方を前部(敵者)として設定し了ってから| それを破斥するのは| 「菩提は有所縁と成り| |祖師も(1/2)所縁と共なるものと成り| |無分別[たる]知覚には成らなくて| |何故ならば」事物にとっては所縁であるが故[に]| |」と[いう]こと[たる]根本[と]注釈[と]によって| 如来の智による個別的自己による証悟と言われる或るものが有るならばそれ等の過失が入ると説示されたのである| |

第一段落の「第二」の「回答」について、著者は『思擇焰』から敵者の二種類の主張を引用し、それが「中[と]辺」「の沢山の[考え]方」であるとし、それを「破斥する」為に、同じく『思擇焰』から一種類の教証を提示して「如来の智による個別的自」「証」「が有るならば」教証の如くの「過失が入る」とする。

【第 12 段落】その意義を詳(2/3)細にマア他に説示するうえ| 実体性はないと述べる全部の阿闍梨は清弁が説示したその如くに説示するのかと[いう]ならば| 実体性はない派の内からまた| 寂護ご父子などはその如く[に]承認なさらなくて| 「何故ならば」個別的自己[による]証悟の智をご承認なさるが故[に]と| 智は勝者の面に於いて諦であることによるならば勝義の諦であると説示するが故[に]と| 一部の方によっては等持すべき[こと]は顕現[と]共[のもの](有顕現)であると承認なさるが故[に]と| 無着は大乘の

聖者であると承認なさるが故[にと]なのである | |

前段落の「意義を詳細に」「他に説示」とし、更に「実体性は無いと述べる」「阿闍梨は清弁が説示した」「如くに説示するのか」という反論を著者は想定し、それに対して「実体性は無い派の内」「寂護」「父子」「はその如く[に]承認」しないと、その論拠として第一に「寂護」「父子」「は」「個別的自」「証」「の智を」「承認」とし、第二に「一部の方」「は等持」「は」有顕現「であると承認」とし、第三に一般的に「無着は大乘の聖者であると承認」とする。

【第13段落】「世間共許部行派 hJig rten grags sde spyod pa(4/5)たちもその如く[に]承認なさらないのである | |」と教示するのは | 「無着ご足下によって了義はご覧になられなかったと | |説示するその様な[こと]は月[称]の[考え]方でないのである | |」と[いう]こと[で] | 無着が『宝性論の注釈』*rGyud bla mahi hgrel pa*に於いて空性の識別として説示したそれは有効な了義でないのである(5/6)ならば | 月[称]の足下の広釈[たる]『灯明』に於いて説示した五次第の項目の勝義諦の識別と矛盾することと | 言説としても自己[による]証悟を承認なさらないならば | 『入中[観論]』に於けるその分位に於いてそれを承認したことと「妙智[たる]汝が刹那(6/7)にマア所知を了解なさる | |」と[いう]分位の自宗を設定する[やり]方を説示したことと | 「これは聴聞は広大であるけれども他者のご了解[と]成らない | |」と[いう]ことの様に無着は数え上げなかった様に | 世親などが真实性(空性)を了解なさらずに(45b7/46a1)説示したことそのものによってなのである | |

著者は典拠を明示しない二種類の引証を提示し「無着が『宝性論の注釈』で「空性の識別として説示した」ものが「有効な了義でない」「ならば」第一に「月[称]の」『灯明』で「説示した五次第の項目の勝義諦の識別と矛盾する」とし、第二に「言説としても自」「証」「を承認」しないと「ならば」『入中[観論]』で「勝義諦の識別」「の分位に於いて」「自」「証」「を承認した」とし、また「妙智」「が刹那に」「所知を了解」する「分位の自宗を設定する[やり]方を説示」していると、第三に典拠を明示しない一種類の引証を提示し、その様に「無着は数え上げなかった」のに対して「世親」「が真实性を了解」せ「ずに」「説示した」「のである」とする。

【第 14 段落】清弁が説示したそれも | 真实性を決定する[やり]方から開始したのであるのであるけれど | 修習によって体験する[やり]方から開始したのではないのであって | [何故ならば]主尊[者たる]弥勒の典籍が教示したそれを(1/2)否定するならば甚大[に帰]謬するが故[に]と | その典籍を無着が作ったものと承認する[もの]に入れた chug/bcug ならばまた最後のご教誨の経そのものと矛盾することによってなのである | |

第 11 段落の「清弁」の「説示」「も」「真实性を決定する[やり]方から開始したのであ」って「修習によって体験する[やり]方から開始したのではない」とし、その論拠として第一に「弥勒の典籍が教示した」こと「を」「否定するならば」帰「謬する」とし、第二に「その典籍を無着が作ったものと承認する」「ならば」「最後の」「教誨の経」「と矛盾する」とする。

【第 15 段落】言説として勝義を知覚の対境として承認することが必要であるのであって | [何故ならば]『思擇焰』に於いて | 「一切智性として成立した品」(2/3)から一切智者が無辺の所知に対して所縁そのものであると説示したと明らかであるが故[に]である | [|]

「言説として勝義を知覚の対境として承認する」「必要」が「ある」とし、その論拠として『思擇焰』で「一切智者が無辺の所知に対して所縁そのものであると説示し」ているとする。

【第 16 段落】第三は | 「二[として]無い智を諦[として]無いと成就する | 経教[と]道理[と]は『宝性[論]』の根本[と]注釈[との]二に無い | 」と[いう]のは | そこに於いてはその様[に]それは清浄安楽常住[の]我 gtsaṅ bde rtag bdag と | 常住(3/4)恒常寂靜堅固と | 他[によって]空である[やり]方[と]のみであると説示したのは本当に明らかなのでそれ以外[に]説示した見解によってまた性相[として]執着する[こと]を残りなく捨離出来ない様に成るのであると[いう]のは前後のチベットにおいてになった大多数の偉大な方々の面に於いてであるのであるうえ | 或る者はこれはまた唯心なのである(4/5)と云うのは以下[に]直ちに検討されるべく為されるべきなのである |

第一段落の「第三」の「回答」について、著者は典拠を明示しない一種類の引証を提示し『宝性[論]』の根本[と]注釈「に於いては」無二の「智」「は清浄安楽常住[の]我」「常住恒常寂靜堅固」「他[によって]空」「であると説示した」と「明らかなのでそれ以外」の「見解によって」「性相[として]執着する[こと]を残りなく捨離出来ない」「のであると[いう]の」が「チベットにおいてになった大多数の偉大な方々の」考え方「である」し「この考え方」は「唯心」「である」「と云う」批判は「以下[に]直ちに検討される」「べき」「である」とする。

＜2 2 2 2 3 3 1＞【第1段落】最初[の項目]は| 「所取[と]能取[とたる]戲論の集合を(5/6)全て否定した[ように]為したけれども| |二[として]無い智は増上として残る[ように]成ったならば| |等覺の道と成らないと| |述べるその人がこの意義を考えるべく為しなさい| |」と[いう]ことに於いて| 如何であれ話として述べるのは| 「後代の沢山のチベット人は所取[と]能取[との]二[として]無いと言われる意義と言説[との]両(6/7)者を承認せず且つ| その様[に]二者は諦[として]無いと[いう]ことだけのみを承認する様に為すけれども| 智そのものは能取の範囲に属すると同意することと| また所取[たる]遍計[所執性]と能取[たる]遍計[所執性]とが分かる意義は言うまでもなく| 言説のみも耳の対境(46a7/b1)として共許でなしに| 所取[と]能取[との]実質が他によって空である空性と[いう]意義と言説[との]みによって中間の三の弥勒[の]法の見解の詳細が究明されたことに同意することと[ ]最後のご教誨と弥勒の中間の典籍[と]から能取は諦[として]無い[こと]の設定すべき[こと]を教示したこと[と]は(1/2)無いのである| |」と云うそれ等の人によっては| 瑜伽行の大海の如き典籍の彼岸[は]のみならず| 部分[的]のみにとしても行かれたことは無いので| その人々が思った疑惑は暫くここで究明されたと為されるべきことでないのだ| |

著者は典拠を明示しない一種類の引証を提示し、その引証中の「意義を考え」させる「べき」「人」の誤った主張として別異の一種類の引用を提示した上で「それ等の人」「は」「瑜伽行の」「典籍の彼岸」は無論のこととして「部分[的]」「に」「も」「彼岸」に「行」つ「たことは無いので」「その人々」の「疑惑は」まだ「ここ」まで「で究明されたと為」る「べきことでない」と批判する。

【第2段落】ここで究明されたと為されるべきその疑惑は何かと[いう]ならば| (2/3)最後のご教誨[で]『解深密[経]』と共なるものそのものに於いて| 遍計[所執性]の名前を有つ所取と能取[との]二者は自己の実体によって空であると決定したけれど| その二者によって全く清浄な基礎[の]時(基位)の[智]と| その空を対境と為す道[の]時(道位)の[智]と| (3/4)偶然の全部の汚垢を捨離した結果[の]時(果位)の智[との]三者は自己の実体によって空であると成就する[ように]為す道理を説示しないのみに終わらず| その三者は基礎[と]道[と]結果[と]の究竟の住[する考え]方(本性)そのものであると説示したうえ| その時[に]經典[たる]それとそれ[と]などから(4/5)説示したその見解は修習される様に為されたけれど[所]知障の種子を捨離出来ない様に成って| [何故ならば]一切法は実体性によって空であると決定しなかったことによるならば空性の見解は完全に円満すると教示されなかったが故[に]である| と[顛]倒する様に分別することがそれなのである| |

著者は「ここ」以下「で」で究明されたと為る「べき」「疑惑は何かと」自問し、自答して敵者の見解は『解深密[経]』等の「最後の」「教誨」「に於いて」「遍計[所執性]の」「所取と能取」「は自己の実体によって空であると決定したけれど」「それ」「によって」「清浄な」基位「の」智「と」「空を対境と為す」道位「の」智「と」「偶然の」「汚垢を捨離した」果位「の」智「は自己の実体によって空であると成就」させる「道理を説示しない」だけでなく「その三」「智」「は基」と「道」と「果」「の究竟の」本性「であると説示し」更に「その時」或る「經典」「から説示した」「見解は修習さ」せら「れた」にしても所「知障の種子を捨離出来な」く「成」とし、その論拠として「一切法は実体性によって空であると決定しなかった」「ならば空性の見解は」「円満すると教示されなかったが故」に「である」としており、著者はこの敵者の見解は顛「倒」した「分別」「である」と批判する。

【第3段落】何によってか[ということ]であるならば| 「この意義(5/6)が思われるべく為されるべきなのである| |」と[いう]のは| 説示する様に成る無間の経教と道理[と]によってなのである| |

前段落で敵者の見解は顛「倒」した「分別」「である」と批判する著者の論拠を自問し、自答して典拠を明示しない一種類の引証を提示した上で「無間」に「説示する」「経教と道理」「によって」「である」とする。

<2 2 2 2 3 3 2 1>【第1段落】最初[の項目]は| 「空性を教示する[密]咒[の]意義を思うべく為したことによって| |智慧資糧を積むべく全く清浄に成り了ってから| |空性[たる]智金剛は私であるのだと[いうのが]| |増上の天(本尊)を成就する[ように]為す何であれ[やり]方であるのである| |」(46b7/47a1)と[いう]ここに於いて| 要略した意義[たる]帰謬を記載すべきことと| それそのものを語句[と]意義[と]の門から説示し[ること]と[と]なのである| |

著者は典拠を明示しない一種の引証を提示し、その引証を解説するのに第一に「要略した意義[たる]帰謬を記載する」「ことと」第二に「帰謬を」「語句[と]意義[と]の門から説示する」「こと」とがあるとする。

【第2段落】最初は| 波羅蜜多[の]乗が事前に行かなかった(加行されなかった)[密]咒の成就者[たる]有法は| 『[勝]樂[小品]』 *bDe*(北京版 No. 16) [と]『喜[金剛統]』 *dGyes*[と]『秘密[集会]』 *gSari*[との]三などの成就儀軌(1/2)の典籍[たる]それとそれ[と]に於いて聞[学と]思[量と]と修習[と]を為す知覚によって修習する様に為されたけれども[所]知障の種子を捨離出来ない様に成って| [何故ならば]基礎[と]道[と]結果[と]の時の三者の智は実体性によって空であるとそれ等の典籍で決定し[て]いないことによるならば空性の見解は(2/3)究竟のものでないが故[に]である| [|]

前段落の第一「は」「波羅蜜多[の]乗」を加行しなかった密「咒の成就者[たる]有法は」『[勝]樂[小品]』『喜[金剛統]』『秘密[集会]』『などの成就儀軌の典籍]それぞれ「に於いて聞」「思」「と修習」「を為す知覚によって修習」させられたけれど」所「知障の種子を捨離出来ない」く「成」とし、その論拠として「基」「道」「果」位「の三」「智は実体性によって空であるとそれ等の典籍で決定し」「ていない」ので、その「空性の見解は」「究竟のものでないが故」に「である」とする。

【第3段落】第二は| [密]咒の成就者が智慧の資糧を実行する時[に]| *sūnya ta dzñā na badzra sva bhā va ātma ko 'ham*| と[いうやり]方によってその我慢に等引した[それがそうである]通りに増上の天(本尊)を成就



する様に為す何らかの[やり]方によってそれは(3/4)支配されないことに[帰]謬し[て] | [何故ならば]その成就者が実行するその時[に]空性を教示する[密]咒と[いう]もの[たる] | sva bhā va śuddha | と[いう]等の意義を思うべく為したことによって修習すべく為されるべき空性を決定したことであるのであり且つ | それより増上の他の道理を思わなかったうえ | それのみによって(4/5)智慧資糧を積むべきであるけれど見解が全く清浄に成り了ってから | 所取[と]能取[との]二[として]無い智を śuddho 'ham と修習する[ように]為す知覚の対境そのものとして設定したが故[に]である | と[いう]ことなのである | |

第一段落の「第二は」密「咒の成就者が智慧の資糧を実行する時」真言「によって」「我慢に等引した」「通りに」本尊「を成就」させるやり「方によって」本尊「は」「支配されないことに[帰]謬」するとし、その論拠として「その成就者が実行する」「時[に]空性を教示する[密]咒」たる真言「の意義を思うべく」させた「ことによって」「修習す」「べき空性を決定した」一方で、その「空性」「より増上の他の道理を思わ」ず、更にその「空性」「のみによって智慧資糧を積むべきである」のに「見解が」「清浄に成」った後に「所取[と]能取」の「二[として]無い智を」真言の如く「修習」させる「知覚の対境」「として設定したが故[に]である」とする。

【第4段落】その如く[に帰]謬することに於いて | 大乘のこの[考え]方に於ける有法[たる] | 所取[と]能取[との]二[として]無い(5/6)智を体験するその般若は中[観]の究竟の見解であるのであって | [何故ならば]生起次第の最初に体験すべく為されるべき見解そのものであるのであるが故[に]なのである | と発するのである | |

前段落の著者の主張「の如く[に帰]謬することに於いて」「大乘」「に於ける有法」たる「所取[と]能取」の無二の「智を体験する」「般若は中[観]の究竟の見解である」とし、その論拠としてその「見解」は「生起次第の最初に体験す」「るべき見解」「であるが故[に]」「である」とする。

<2 2 2 2 3 3 2 2>【第1段落】第二[の項目]は | 「[密]咒によって所取[と]能取[との]二[として]無い[こと]を思うべく為し了ってから | | その智が増

上として(6/7)残ったそれそのものを| |個々の儀軌によって増上の天に成就し了ってから| |この時そのものに於いて成仏すべく為すことではないのであるのか| |と[いう]このことに於いて| |要略した意義を因由として記載すべきことと| |その三の[やり]方を語句[と]意義[と]によって説示し了ること[と]なのである| |

著者は典拠を明示しない一種類の引証を提示し、その引証を解説するのに第一に「要略した意義を因由として記載する」とし、第二に「三の[やり]方を語句[と]意義[と]によって説示する」とする。

【第2段落】最初は| |所取[と]能取[との]二[として]無い智[たる]有法は| | (47a7/b1)究竟の了義であるのであって[何故ならば]増上の天そのものを何らかの因から成就する基礎であるのであるが故[に]である| | [ ]

前段落の第一は「所取[と]能取」の無二の「智[たる]有法は」「究竟の了義である」とし、その論拠としてその「智」は本尊「を」「因から成就する基礎である」「が故」に「である」とする。

【第3段落】第二に於いて| |宗法を経教によって成就することと| |異[品]遍充 *ldog khyab* を道理によって成就すること[と]なのである| |

第一段落の「第二に」二あって、その第一は「宗法を経教によって成就すること」であり、第二は「異[品]遍充を道理によって成就する」とする。

【第4段落】最初は| | *sva bhā va* と| | *yo ga śuddha* と| | *sū nya ta* [との]如くの[密]咒によって| | 所取[と]能取[との] (1/2) 二者のみの自性が無いことそのものに付いて想うべく為したのであるのであるけれど| | 中[観帰]謬[派と]自[立]派[との]如く[に]一切の所知をそこで想うべきなのではないのであって| | [何故ならば密]咒[の]意義を想うその時に二として無い法の界の[体性]智が増上として残り且つ設定されたそれは| | 利那(2/3)によってか| | 三の金剛儀軌(?) *rdo rje cho ga gsum* によってか| | 五の現[証]菩提の如きが各々の成就法から生起する集団を増上の天として成就し了ってから| | 成就者はこの時そのものに於いて成仏すべく為されるのではないので

あるのか| と[いう]譴責した語句によってであるのであると説示するのである| |

前段落の第一について、密「咒によって」「所取[と]能取」「のみの自性が無いこと」「に付いて想う」様にさせた「けれど」「中[観帰]謬[派と]自[立]派」の「如く」「一切の所知をそこで想うべき」「ではない」とし、その論拠として密「咒[の]意義を想う」「時に」無二の「法の界の[体性]智が増上として残り」「設定されたそれは」「刹那」であれ「三の金剛儀軌(?)によって」「であれ「五の現[証]菩提」「が各々の成就法から生起する」の「を」本尊「として成就し」「てから」「成就者はこの時」「成仏」させら「れる」筈である「と[いう]譴責した語句によってである」とする。

【第5段落】第二(3/4)は| その因は異の品に有るのでないのであって| [何故ならば]増上の天と明咒 rigs/rig snags[と]の成就する基礎は世俗諦に於いて可能であるならば| 生起次第の最初に空性を修習する必要があることと| 個々の生じる儀軌[と]同様でない沢山の門から個々の天を生じる必要がある(4/5)こと[と]に[帰]謬することと| 虚偽でない所依に依存し「ることを現前に為す時[に]も| śrī He ru ka ha と[いう]憶念を[事]前に発する必要があることに帰謬することと| 住する[やり]方(状況)の仏陀と世俗諦の基礎[と]が一致し得ることに帰謬すること[と]等の門から| 不饒益を有つ正量を生じる[ように](5/6)為す沢山の道理などを経教に依存してから教示する様に出来るのである| |

第3段落の「第二」について「その因は異」「品に」無いとして、その論拠として本尊と「明咒」「の成就する基礎は世俗諦に於いて可能であるならば」第一に「生起次第の最初に空性を修習する必要がある」く、第二に「個々の」「生起次第の」「儀軌[と]同様でない沢山の門から個々の」本尊「を生じる必要があること[と]に[帰]謬する」とし、第三に「虚偽でない所依に依存」す「ることを現前に為す時」真言の「憶念を[事]前に発する必要があることに帰謬する」とし、第四に状況「の仏陀と世俗諦の基礎」「が一致し得ることに帰謬する」とし、それ「等の門から」「不饒益を有つ正量を生じ」させる「沢山の道理」「を経教に依存して」「教示」「出来る」とする。

【第6段落】この意義に対して後[代]のチベット[の]方達は曰く| 「atma ko 'ham と何かに等持する対境は空性の智であると言われるその識別は| 対境[たる]空性と有境[たる]智[との]二者は水に水をと(6/7)酥油に酥油を保存したこと[が]そうである| 通りに無区別に行ったそれであるのであるうえ| その如くの意義が通曉されることに於いても帰謬派の見解によって究明される或ることが必要なのである| 」と仰せになり| 一般[的に密]咒の見解が通達される方便と| 帰謬派の見解を決定する[ように](47b7/48a1)為す道理[と]は矛盾するのであるとはここでも述べないのであるのであるけれど| 貴方の見解に於いてItarであるならば| その道理に依存せずに[密]咒の見解が通達される方便は無いことそのもの[たる]主張として顕現すること[で]| それに対して論駁すべく且つ分別すべきことをこの如く[に]入れることは| 二であって| (1/2)[何故ならば]経教[と]道理[と]によって不饒益であることと| 承認したことによって障害であること[と]なのである|

以上の著者の主張「に対して後[代]のチベット」人「達は曰く」として典拠を明示しない一種類の敵者の批判を提示し、その批判について密「咒の見解が通達される方便と」「帰謬派の見解を決定」させる「道理」が「矛盾する」「とはこの批判に於いて「も述べない」「けれど」敵者の「見解に」従うならば「帰謬派の」「道理に依存せずに[密]咒の見解が通達される方便は無い」という「主張として顕現」しているので、その批判「に対して論駁」し「分別すべきことを」以下に挿「入」すると「二」「あ」とし、その論拠として、その批判は第一に「経教[と]道理」「によって不饒益である」とし、第二に「承認したことによって障害である」とする。

【第7段落】最初は| [密]咒の智慧資糧を積む sog/gzog 実践それは| 中[観帰]謬[派と]自[立派と]であると述べる方々の純粋な[考え]方それと設定する[やり]方は一致するものでないのであつて| [何故ならば]その[考え]方に於いては智もまた自己の(2/3)実体によって空性であるのであることによるならば智の金剛と言われるものを承認しないが故[に]と| 空性の智を体験する修習[から]生起した知を承認しないが故[にと]である| [ ]

著者は前段落の第一について、密「咒の智慧資糧を積む」「実践」「は」「中[観

帰[派と]自[立派]」の「方々の純粋な[考え]方」「と設定する[やり]方」は一致し「ない」とし、その論拠として「中[観帰][派と]自[立派]」の「[考え]方に於いて」第一に「智も」「自己の実体によって空性であるので」「智の金剛」「を承認しないが故」にであり、第二に「空性の智を体験する修習[から]生起した知を承認しないが故」に「である」とする。

【第8段落】第二は| 水に水を保存したけれど喩例によって教示したその無区別を何と為すのか| 空性は智(4/5)の実体として無区別であるのであるのか| 智が空性であることに於いて無区別であるのである| 最初の如くであるならば| 貴方がその様[に]それを世俗の諦そのものとして承認したので聖者の等引した智に世俗分の有境は不可能である[と]の承認した[こと]が損壊することと| (5/6)無区別[たる]因の空性それも他[によって]空である[こと]から脱し[て]いないくて| [何故ならば]その智は自己の実体によって空でないが故[に]なのである| |

第6段落の「第二」について「水に水を保存したけれど喩例によって教示した」「無区別」は「何」である「のか」と著者は自問し、自答して「空性は智」「の実体として無区別である」「のか」そうではなく「智が空性であることに於いて無区別である」とし「実体として無区別である」「ならば」敵者である「貴方が」「智」を「世俗の諦」「として承認したので聖者の等引した智に世俗分の有境は不可能である」と「承認した[こと]が損壊する」とし、また「無区別」な「因の空性」「も他[によって]空である[こと]から脱し」「ていな」とし、その論拠として「智は自己の実体によって空でないが故」に「である」とする。

<2 2 2 2 3 3 2 3> 【第1段落】第三[の項目]は| 「何であれその見解が全く清浄[に]成ったならば| 無着ご足下[の]典籍[の]見解は如何なる如く[に]錯誤するか| |」と[いう]のは| [密]咒の智慧資糧を積む実(6/7)踐の時のその見解は中[観]の見解そのものとして成立したと承認もした時に| 無着兄弟の典籍から生起した究竟のその見解は中[観]そのものとして成立したのであるのであって| [何故ならば]二者のその[考え]方の見解を決定する[ように]為す思量した[ことから]生起した道理と| (48a7/b1)修習する[ように]為す知覚によって体験する[ように]為されるべき空性[と]の識別に於いて差別は見えないが故[に]であり| その分かる[ように]為す[もの](理

由)も| [考え]方[の]両者に於いて| 道理によって所取[と]能取[と]は自性が無いと想い了ってから| 二[として]無い智のみを体験する[ように]為されるべきであると説示(1/2)されたのである| |

著者は典拠を明示しない一種類の引証を提示し、その引証は密「咒の智慧資糧を積む実践の時の」「見解は中[観]の見解」「として成立したと承認」「した時」「無着兄弟の典籍から生起した究竟の」「見解は中[観]」「として成立した」とし、その論拠として「無着兄弟の」「見解」と「中[観]の見解を決定」させる「思量した[ことから]生起した道理と」「修習」させる「知覚によって体験」「されるべき空性」「の識別に」「差別は見えないが故」に「で」とし、更に「その」理由「も」「無着兄弟の」「見解」と「中[観]の見解」「に於いて」「道理によって所取[と]能取」「は自性が無いと想」「ってから」無二の「智」「を体験」させら「れるべきであると説示された」とする。

【第 2 段落】それから成立した意義のこの理由の如く[に]| 所取[と]能取[と]は自己の実体によって空であると決定し了ってから| その意義そのものを実践する見解がそれであるのであるならば中[観]の見解であるのであることによって遍充され| 喩えとしてならば[密]咒[の]道の智慧資糧を積む見解[が]そうである[通り][に]| 「無(2/3)着兄弟の典籍から説示された見解もそれであるのであるのだ| |」と宗法と追隨者 rje/rjes hgro を明白に詮説し了ってから| 回避するのは| 能取は自己の実体によって空であると決定する[ように]為す聞[学と]思[量と]と| それそのものが修習される様に為す修習[と]から生起した智は唯心(3/4)派以下に於いて有るのでないのであるが故[に]なのである| |

著者は前段落の主張の「意義の」「理由の如く」「所取[と]能取」「は自己の実体によって空であると決定し」「てから」「その意義」「を実践する見解が」前段落の如く「である」「ならば中[観]の見解」「によって遍充され」「喩え」ば密「咒[の]道の智慧資糧を積む見解」の「通り」にとして、その論拠として典拠を明示しない一種類の教証を提示し、その教証は「宗法と追隨者を」「詮説し」「てから」「回避するのは」「能取は自己の実体によって空であると決定」させる「聞」「思」「と」「空」「が修習」「され」させる「修習[と]から」生起した智は唯心派以下に「ない」「が故」に「である」とする。

<2 2 2 2 3 3 3 1>最初[の項目]に於いて| 論争は| 「円満の次第の或る他の智によって| 善[現]天 gya nom lha[r]に愛着する[ように]分別するのを排除する[ように]為すならば| 」と[いう]こと[で]| 加行[たる]智慧資糧を積むその見解は[密]咒[の考え]方に於ける空性の究竟の見解でないのであって| (5/6)何故ならば| それによって善[現]天に愛着する分別を排除出来ない因由によってそれを排除する[ように]為す[の]に円満次第の或る他の見解を実践する必要があるが故[に]| であると[いう]ならば| 回答は| 「ここに於いても二[として]無い智それそのものに対して| 性相[として]執着する[こと]を他の智によって排除すると確実である| 」と[いう]こと[で]| (6/7)瑜伽行のこの[考え]方に於いても| 円成[実性]の名前を有つ二[として]無い智それそのものに対して性相として執着する分別は| 前の智それそのものの同類[たる]他の後[の智]によって排除すると確実であるけれど| それより増上の他の見解を探求しないこと mi tshol/h̄tshol ba それ[が]そうである]通りに| (48b7/49a1)持明者の実践の時[に]| も| 光明の名前を有つ智それのみによって善[現]天に愛着する分別を排除する様に為すのであるのだけれど| その様[に]| その如くである部分から智慧資糧を積むより増上のものでないのであって| [何故ならば]その見解[の]二者も二(1/2)として無い智と言われるもの[で]| 勝義[たる]善[提]心[の]名前を有つそれそのものであると説示すると| 『五次第』と『集[修]行灯』[と]そのものから明らかに仰せになったが故[に]| なのである| |

著者は「論争」する敵者の主張として、典拠を明示しない一種類の引証を提示し、その主張内容として「加行[たる]智慧資糧を積む」「見解は[密]咒[の考え]方に於ける空性の究竟の見解でない」とし、その論拠として「加行[たる]智慧資糧を積む」「見解」[によって]善[現]天に愛着する分別を排除出来ない」ので「その」「分別」「を排除」させるの「に円満次第の」「見解を実践する必要があるが故[に]」「である」としているけれども、その敵者の主張に対する「回答」として、同じく典拠を明示しない一種類の引証を提示し、その「回答」内容として「瑜伽行の」考え「方に於いても」「円成[実性]の名前を有つ」無二の「智」「に対して性相として執着する分別は」「前の智」と「同類」の「他の後[の智]」によって排除すること「確実であるけれど」「それより増上の他の見解を探求しない」「通りに」「持明者の実践の時」「光明の名前を有つ智」「によって善[現]天

に愛着する分別を排除」させる「のだけれど」以上の「如く」に「智慧資糧を積むより増上のものでない」とし、その論拠として「円成[実性]の」「智」と「光明の」「智」「の見解[の]二者も」無二の「智と言われ」「勝義[たる]」「菩[提]心」「そのものであると説示すると」『五次第』や『集[修]行灯』「から明らかに仰せになったが故」に「である」とする。

(以下続く)